



教材開発例２ 「時をおよぐジラ」

〔小学校中学年 主題：自然愛 内容項目：3の（２）〕

地域の自然に親しみ、不思議さやすばらしさに感動させる工夫

〈素材—ショウバラクジラ—について〉

- 庄原市（中国山地）から発見されたクジラの化石である。
- 平成20年に新種と認定され、発見者の名前や地名が学名となっている。
- 現在、山の奥である場所が、数百万年前は、海の底であったことから、自然の不思議さや地球の雄大な変化に感動させられるものである。

新生代三期 (1600万年前)	庄原一帯は、古瀬戸内海であり、多数の海の生き物が生息していた。
新生代四期 (1000万年前)	この頃、現在の地形となった。
昭和初め頃	貝や魚の化石が発見され、地質学調査が始まる。
昭和56年	山岡隆信さんらが、クジラ三種を発見する。仮名「ショウバラクジラ」となる。
平成8年	庄原化石集談会が創設される。
平成20年	山岡さんらが昭和56年に発見したクジラが新種と認定され、「ヤマオカクジラ」と命名される。

ショウバラクジラ発見の歴史

〈素材の選定、情報の収集のポイント〉

Q & A	
Q 1：自然の偉大さや生命の尊さ等、感性に訴えるものですか。	A 1：山地からクジラの化石が発見された事実から自然の雄大な変化を感じ、素直に感動できるものです。
Q 2：自然と人間とのかかわりについてはどうですか。	A 2：人間も動植物も自然環境に適応して生活を営んでいることを感じさせることができます。
Q 3：科学的な裏付けをとりましたか。	A 3：専門家の方に取材し、庄原市一帯が、古瀬戸内海と呼ばれる海であったことは、通説となっていることを確認しました。

〈資料「時をおよぐクジラ」の作成〉



内容として、まず、三つを候補として考えて検討した。最終的には、生命尊重〔3の（１）〕で作成することとした。

勤勉努力〔1の（２）〕 小学校低学年
生命尊重〔3の（１）〕 小学校低学年
自然愛〔3の（２）〕 小学校低学年

クジラを主人公としてファンタジックに描き、悠久の時の流れにおける自然の不思議さやすばらしさ、地球の雄大な変化に感動させるものにできると考えた。

自然愛〔3の（２）〕 小学校低学年

第1稿

推敲の視点

構成チェック票④
「登場人物の取り合わせとやりとりが無理がないか」

構成チェック票③
「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

構成チェック票⑥
「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

最終稿

〈課題点〉

絵本をイメージし、イラストの活用を考えていたため、文章だけでは伝わらないものとなった。

〈改善点〉

文章を補い、イラストがなくても、読み取れるものとする。また、空想的に描く中でも、基本的な設定は、事実に基づいたものとする。

〈課題点〉

表現を工夫したり、補足説明を加えたりしたが、小学校低学年では、悠久の時の流れについての理解が難しい。

〈改善点〉

内容は、自然愛〔3の（２）〕のままとし、自然の不思議さやすばらしさに感動できるよう、ファンタジックさは生かしつつ、表現を小学校中学年対象に変更する。

中心場面（山場）において、死の世界になったと思っていた海が、命豊かな森に生まれ変わった場面での主人公の喜びを表現した。その際、「大きな声で呼びかけた・・・」「あたたかい目で・・・見続けた」のように、行動を通して、心の動きを表現することに留意した。



時をおよぐクジラ

むかしむかしのそのまたむかし、人間がこのちきゅう上にあらわれる前のお話です。そのころは、このちきゅうはしぜんゆたかで、どうぶつたちや魚たちの楽園でした。

クジラのショウちゃんは、ゆたかな海で生まれ、大すきなお父さん、お母さん、友だち、そして、多くのなかまとともに、楽しくくらしていました。

ショウちゃんは、このしぜんゆたかな海が大すきで、いつもおさん歩に出かけていました。数千びきの小魚のむれ、見たことのないようなふしぎな形をした生きもの、とってもきれいでうっとりするような魚たち、海のそこでゆらめく数え切れないほどの海草、そのたくさんの生きものとの出会いが、ショウちゃんにとって何よりのよろこびでした。

海のさん歩からもどったショウちゃんは、お友だちのノブちゃんと出会いました。

「ショウちゃん、また海のおさん歩に行っていたの。」

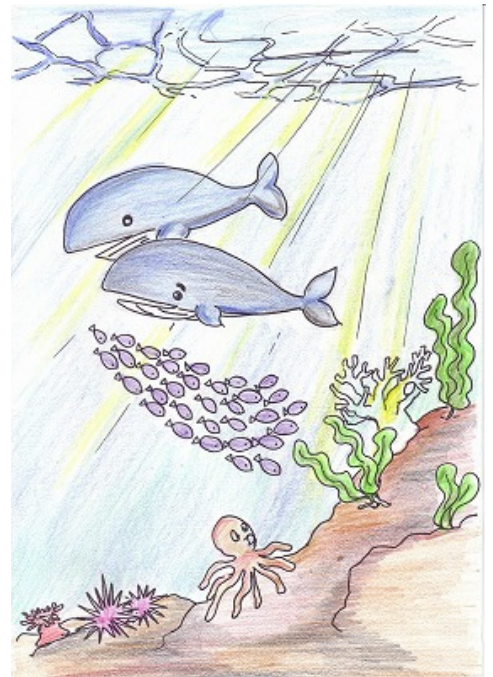
「うん、だってぼく、いろいろなお魚さんたちにあったり、お話ししたりするのが楽しいんだもん。」

「本当にショウちゃんは、この海が大すきなね。」

「ノブちゃんもいっしょに行こうよ。本当にたくさんの生きものが、この海にはいるんだよ。」

「うん、行こうか。じつは、わたしも、この海が大すきなんだ。」

二人とも、この海に生まれてきたことをしあわせに思っていました。



ところが、このしぜんゆたかな海に大へんなことがおこったのです。だんだんと海の水が引きはじめ、海草はひ上がり、多くの魚がいきたえていったのです。

「ぼくの大すきだった海が……。いのちいっぱい海が……。」

だけどショウちゃんにはどうすることもできませんでした。一つ一つきえていくいのちを見まもることしかできなかったのです。そして、

とうとうお友だちのノブちゃんも、お母さんもお父さんもみんななくなってしまう、ショウちゃんも、水がなくなった海のそこで、一人ぼっちで、よこたわってしまいました。

「このまま……この海も、しのせかいになっちゃうのかな……。」

「いやだ。そんなこと……、そんなせかいなんて……。」

ショウちゃんの目から、なみだが一つぶこぼれおち、一つぶのたねの上におちました。そして、そのたねから出てきた小さなめを見ながら、とうとうショウちゃんも力つきていきました。



それから、長い長い時がすぎていきました。ショウちゃんのか石となって、岩の中でねむりつづけました。



どれぐらいの時がたったのでしょうか。ねむりつづけるショウちゃんに、小さな音が聞こえてきました。「チュン」「チュンチュンチュン」「ピ・ピ・ピ・ピー」「サヤサ ヤサヤ・・・」



「ん……。何の音だろう。」

ショウちゃんが目をあけると、そこには、一人の男の子が立っていました。

「クジラくん見いーつけた。」

ショウちゃんは、か石をほりに来た一人の男の子にはっ見されたのです。

そして、長いねむりからさめたショウちゃんの目の前には、思いもかけなかった光けいが広がっていました。そこは、たくさんの生きものにかこまれた緑ゆたかな森だったのです。



長い年月がたって、海の生きものたちが土にかえり、そしてえいようとなり、新しいいのちに生まれかわったのです。ひ上がった海に草がはえ木がしげり、そして、たくさんの虫や鳥、どうぶつたちが生き生きとこの森をかけ回るようになったのです。

「あのしんだ海が、こんなゆたかな森に……。」

「草がはえている。木がしげっている。鳥がとんでいる。どうぶつたちがかけ回っている。歌声が聞こえる。わらい声が聞こえる。みんな生きている。みんな生きているんだ。」

「ノブちゃん、お母さん、お父さん、見てごらん。ぼくたちの海が、こんなみどりゆたかで、どうぶついっぱい森に生まれかわったんだよ。」

ショウちゃんは、とってもとってもうれしくなって、今この森をかけ回っているどうぶつや草や木たちに、そしてむかしの海のなかまたちにとどくように、大きな声でよびかけました。

「ありがとう、みんな。」

そして、あたたかい目で、いつまでもこの森を見つづけていました。

【参考文献】

古川義雄・山岡隆信著（2002年（平成14年））「備北層群」 庄原化石集談会

庄原市立比和自然科学博物館（2008年）「第61回特別展『備北層群産出のクジラ類化石』展示解説」絶版